ほんない歴史通信
第２０号
2001.9.1

霊能者
ワカサマ・おさやんのこと

江田七男

私が生まれた年は昭和十年（一九三五）。この時親爺夫婦は四十一歳だった。当時の年齢は数え年で、生まれた年を一歳と数えたと思う。男性の厄年は四十二歳、親がこの年に二歳になる子は、悪い運の人生を歩む。俗に言う「四十二の二つ子」であって、その赤ん坊は取子に出せばその悪運から逃れられる、というのが当時の俗信であったらしい。

その四十二の二つ子であった赤ん坊が私だった。そこで私はワカサマ「おさやん」（本名を知らない）の取子に上げられた。広辞苑で「取子」を引いてみると、「もらい子、養子」さらに「生児を社寺の門前等に捨てるまねをし、神官・僧侶等に拾ってもらい、それをもらい返して育てること」とある。おさやんの前で母から「七は捨てられたのをこのおさやんに拾ってもらったんだぞ」、と話された記憶がある。結局、私にとってワカサマのおさやんは第二の母なのである。

盲目のおさやんは生瀬の人で、毎年冬の農閑期に誰かに手を引かれて私の集落に上がってきた。私の姉の記憶では手引きは女の人だったという。当時私の集落は九戸あったが、おさやんの回るのは三戸だった。私の記憶では前夜泊まった家の人に手を引かれて私の家に来た。日中は鈎吊しに鉄瓶が掛かり薪の燃える囲炉裏で煙管たばこをくゆらしながら、身の上話や世間話をする。時には私の母が縫い針に糸を通すことが老眼でむずかしいので、「おさやんおさやん、針に糸を通しておくれ」と頼むと、全盲のおさやんが「眼開きは不自由なもんだなや」と、スイと針に糸を通してしまうのを鮮明に覚えている。

夕食が済んで一休みしている間に、母は四十ワット程の裸電球一個の薄暗い中座敷の上にある神棚にむけて古ぼけた座り机を一脚置く。その机の上の両端に緑の笹のついた寒竹で、長さ三十センチ程のもの十本ぐらいを、下の方を半紙で巻いてコヨリで束ねたものを一束ずつ置く。そして机の中ほどにはローソクの灯明、水、茶碗に盛った御飯もあっただろうか。それに姉の記憶では、小銭を紙切れに包んだおひねりもあったという。

その用意をしているのと同時に、家族の皆はその座敷に作られている掘炬燵に入って、「今夜は誰が出てくるか、何を聞こうか」と、期待とも思われるようなことを話している。誰がというのは、その家の祖先の誰かということ。何を聞く、というのは誰かの病気や心配事などである。

いよいよ白の装束に身を覆ったワカサマが机の前に座る。やおら寒竹の束を両の手に持ち、何事か唱えること数分だったろうか。灯明の火が大きく揺れ始めると同時に、手に持つ寒竹が

カサカサと音をたてて揺れ始める。その家の祖先の霊がワカサマに乗り移ったことを家族の誰もが信じて疑わない雰囲気で、「ほら、来たぞ来たぞ」と誰からともなくささやきがもれる。

霊の乗り移ったワカサマの声、節回しは一種独特なもので聞き取りにくいが、それが何と言っているか結構解することができたようだ。聞いている家族は、「爺ちゃんだ、婆ちゃんだ」と推定し、「どうすればこの病気は直っぺ」とか「どうしたらよかっぺね」とか聞く。或る病気のことで聞いた時に、「シラートリノアタマヲセンジ、ノムベシ」と聞いたのを確と覚えている。このようにしておよそ一時間ぐらいだっただろうか、涙を流して泣きながら、あるいは多少の笑いもしながら祖先の霊とワカサマを通して語り合うのであった。

私の家へ来ていたのは昭和三十年頃までだっただろうか。

青森県下北半島の恐山に、イタコという口よせをする巫女が居て、俗世の人が祖先と語り合うという話を聞くが所作の違いはあっても、霊界と俗世との媒介役であることは同じものであろう。

おさやんから聞いた話では、修行時代の厳しさは言って聞かせても信じられないだろうという。厳寒でも早朝に起きて、井戸の水で体を清めるという禊ぎをしてから一日が始まったという。この修行が何年続いたかについては聞いていないが、何れにしても霊界と俗界とを結ぶ霊能者として生きるために大へんな努力をして来たらしい。おさやんは易もやった。因みに私の人生はその易の通り運んでいる。

記憶が断片的でまとまりのないものとはなったが、昭和十年代から三十年頃までの、ある意味で良き時代の想い出である。

【閑話休題】

近年、各地で文化財の公開が盛んである。とりわけその中でも伝統行事や民俗芸能等の無形民俗文化財などは、公開や開催される場所と時期・時間のチャンスを逃すと次の機会にとなってしまうので、この時とばかり研究者や好事家・見物人が大勢おしかけ、プロ、アマを問わず多数のカメラマンがシャッターチャンスをねらっている。

特にその公開がテレビで中継されたり、新聞や研究誌等に紹介されればなおさらのことである。これはまた、文化財保護について認識してもらうえで大いに役立っていることも事実である。

しかし、ここにに一つの大きな危険性が含まれていることを承知しておいてもらいたい。それは当事者がそれ以外の者、つまり前記のような第三者からの眼を意識するあまり、その要望に迎合して様式や形式等を変更したり、あるいは本来の伝統が歪められたり失われたりすることがあるからである。

長い年月を経ることによって築きあげられ、その地域に根ざしたものは、それ本来の姿、形をそのままに次世代へ継承することが文化財保護の基本であろう。いまこの精神を見失えば、文化財はその時から文化財としての価値を失なってしまい、その使命は終わったといえよう。

（吉成）

［学校昔シリーズ］7

授業は楽し

今の授業には、教科書のほかにいろいろな教具が使われる。ラジオ・テレビ・ＯＨＰは勿論パソコンまでも使っている。

昔はそんな物はなかった。昭和十年代にはまだ教室に電灯さえなかったのである。戦後になって青年の夜学が行われるようになってから、やっと電灯が入った学校が多い。

ラジオはＮＨＫの学校放送が始まった昭和二十五年ころだろうか。テレビは昭和三十二、三年頃ぼつぼつ入るようになってきた。そのテレビは、全面に扉のある頑丈な作りで、学校放送用に作られたものだった。それでも、一般の家庭よりも学校がいち早くテレビを入れたので、野球や相撲の中継があると、よく近所の人が見に来たものだった。

昔はどんな授業をしていたのだろう。黒板とチョークだけで授業をしていたと思うだろうが、そうでも無かった。

一年生の時はノートは使わず、石版と石筆を使った。ノートくらいの小さな黒板のような物だ。書いては消し、消しては書けるなかなか便利なものだった。「けいすうき」という数のお稽古道具のような物もあって、数や図形・時計などの勉強に使った。授業になると、黒板に掛け図が掛けられ、その絵を見ながら話を聞く。地理の時間には大きな地図が掛けられ、まだ見ぬ土地に思いを馳せながら勉強した。

唱歌（音楽）の時間はオルガンだけしか無い。それも足踏み式のオルガンだ。オルガンだけは明治時代からあったようで、どの学校でも大分古くなっていた。だから空気が洩れたり、キーキー音がしたりする。先生が懸命に足で踏みながらオルガンを弾く、子供たちはそれに合わせて大声で歌う。体操と音楽はストレスの発散の時間だった。今のようにピアノはおろか楽器も、レコードなどもない学校が多かった。

体操の時間はたいてい裸足だ。雨が降ると裸足で学校へ来るくらいだから、男女ともに裸足で走り回った。運動会だって裸足で走った。だから運動場は小石など無いようにきれいに掃いたものである。

昇降口のところに足洗い場があって、授業が終わるとみんなそこで足を洗って教室へ入る。

体操の道具と言えば、鉄棒・跳び箱・砂場くらいで、徒手体操が多かった。球技はドッジボールが盛んだった。だから、その頃の生徒は鉄棒や跳び箱はかなり上手で地上転回・空中転回などができる子も多かった。懸命に練習して、できるようになると体操の時間が楽しみだった。

今は球技に偏り過ぎているように思う。徒手体操とか器械体操の分野をもっと取り入れて柔軟性や巧緻性を養うべきだ。

他にも楽しみがあった。六年生の時の担任の大森先生は、放課後になるとよく本を読んでくれた。声色を使って上手に読むので、みんな夢中で聞いていた。この先生は元気が良く、時々生徒は拳骨をのされたりしたが、生徒からは慕われていた。私も拳骨を三つほど貰って、こぶが五、六日痛かった思い出があるが、それでも一番懐かしく思いだされる先生だった。もちろん喧嘩もいじめもあったが学校は楽しかった。

（石井）

楮蒸し（こうぞふかし）

大森政夫

和紙の原料となる楮は、大子地方でも古くから栽培されていた。終戦後まもない頃に小学生だった私は「楮むき」を体験したことがある。

当時、農家では楮栽培が盛んで、撫育管理からある程度の生産加工までが、秋冬期の農家の手仕事であった。生産から出荷までの作業は、老人も子供たちもその過程に応じ従事するのである。時には、近所の人達が手伝うこともあった。

十二月頃から一月にかけて、楮の刈取り作業が始まる。楮は一年で約二メートル位に株立ちするので根切りをする。株は自然生にしておき、次の年に備える。

畑から根切りしてきた楮は更に六〇センチ位の長さに切り揃え、適当な大きさに束ねる。この作業は主に農家の男達の仕事であった。束ねた楮を生楮と言った。生楮が庭に山積みされるといよいよ楮蒸しの作業に入る。作業は短時間で最も人手が必要とされ、かつ賑やかであった。

あらかじめ、農家の庭の片隅に毎年使えるように窯を造っておく。窯は粘土と石で固めたものだ。窯の上には、大人が二人でやっと手が廻る位の大釜をのせる。釜いっぱいに水が入れられる。竹を二ツに割って作った簀を釜にのせて、生楮を縦に積み重ねる。くずれないように生楮を縄で固定する。この上に「こしき」という大桶をかぶせて蒸す。最初に蒸し上がる時間は、約二時間位だ。楮蒸しには経験者の窯番がいる。窯番は常時窯口に居て、火の燃え具合や、楮の蒸ける状態を見守っている。時には窯口でさつま芋を焼いて子供達を喜ばせたりした。「楮がふけたぞー」と窯番は知らせる。当家の人達はもちろん、近所の人達も、手の空いている人々は、筵を敷きつめた庭に集まる。窯番のほか、かけつけた二、三人の男たちによって「こしき」が取り除かれると、ゆげが立ち上ぼる中から、楮が見えてくる。このとき、楮めがけて冷水が手桶でかけられ、固定縄がほどかれる。

庭の筵で待つ人達へ、熱い楮の束が分配される。その楮を囲んで、あちこちで楮むきが始まる。楮の蒸けた甘い香りが、あたりに漂う。それぞれのグループから、おしゃべりや笑い声が聞こえるが手は休むことはない。いつしか寒さも忘れる。

楮むきは短時間で済ませないと、時間が経つに従って皮が剝がれにくくなる。できるだけ大勢で短時間に片付けなければならない。当然遊んでいる子供達も作業にかり出される。

また、楮むきには、上手、下手があって、楮皮をやたら細かく裂いてしまうとか、「すっぽむき」と言って無理に剝がそうとして、最後の部分になって裏返しの筒状にむいてしまうなどは下手だといわれた。そんなことがないように、早く丁寧にむくことをよく言われたものだった。

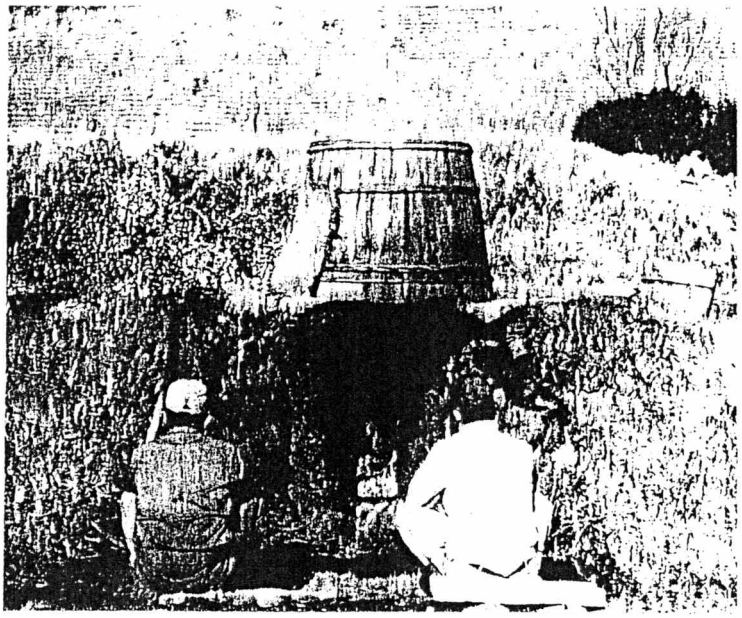
大人のグループに入った子供達も、ぎこちない手で楮をむいている。皮が裂けない場合は噛んで裂口をつくるのだが、これは主に子供達がやる手法で「楮は甘い」味がしたことを覚えている。

また、作業の合間に「やきいも」、「ほどやきもぢ」や「たらしやきもぢ」等農家の手造りが出てお茶休み時間となる。これを「こじはん」といった。子供達はこじはんの魅力か、それ

とも手製の玩具つくりのためか、ともかく楮蒸しには集まるのであった。

楮むきに子供達は、もう一ツの魅力があった。皮を剝いだ木質部を「こうぞっから」という。これは通常農家での薪となるが、木質部が鮮やかな黄色をしているので何故か子供達を引きつけた。

男の子にとっては、チャンバラ遊びの〃刀〃の役目を果し、女の子はミニ杵を作って遊んだ。刀は、ただの棒だけでは面白



楮を蒸す風景（上小川地区）

ないということで、誰が考案したのか、刀の柄（つか）に絵柄（えがら）を焼付けるのである。棒のそり具合を見ながら、先ほど皮むきをして捨てた細い皮を網目状に結び、窯番に「お敬白」しながら、窯口で焦すと絵柄ができた。こうぞっからの刀はそこにいる子供達のひとときの遊び道具となった。

楮むきした皮を「ブイン」と言った。一旦水につけてから、天日乾燥をして一時保管する。いよいよ表皮（ひょうひ）とりをしようとする時は、前日から一昼夜ほどブインを冷水に浸して準備しておく。表皮とりは、ブインから表面の黒皮を小包丁で剝ぐ作業で女性の仕事であった。この作業に使う小包丁は、「切れ味が悪い方がブインを傷つけないから良いのだ」と言っていたおばあさんの言葉をふと思い出した。

冬の陽だまりの縁側で、手ぬぐいをかむり、せっせと表皮とりをしているおばあさん。当時、あちこちで見かけられたのどかな農村風景であった。表皮をとったブインは、同じ細ブインで一定の大きさに結束する。この束を軒先等の綱や竹ざおにまたげて掛け連ねて天日乾燥をする。数日後、ブインはより白さを増してカラカラに干し上がると、仲買を通じて出荷作業が始まる。

今、農家の人は、当時を想い浮かべてつぶやく。「あの頃は荒粉（蒟蒻荒粉）の値段の半分が楮の値段であった。楮の出荷代金が入ると、農作物の肥料代などを支払って、お正月（当時は旧正月）を迎えたものだった」と。まさに時がゆっくりゆっくり過ぎるなかで、近所の人達や老人・子供も、そして男達も女達もみんな一緒になって仕事をした古きよき時代のひとこまであった。

八溝山地の逆転層とプレートテクトニクス

笠井勝美

地質調査所の専門家とともに那珂郡緒川村の猿久保礫岩で逆転層（地層が褶曲で反転して上下が逆になった）を発見したのは、昭和五十三年（一九七八）の秋のことであった。

その後、八溝山地の各所に逆転層があることを見つけ、昭和五十九年（一九八四）には八溝山地での逆転層分布図を作成し発表した。これを筑波大学では、「逆転層は断層の乱れによる小規模のものである」とした。

私は、その真偽を調べるとともに、逆転層説に責任を持つため、その後二十年も八溝山地を駆け巡ってしまった。そして逆転層は、栃木県の益子町や馬頭町、茨城県の七会村などに幅数キロメートルにわたって帯状に分布し、その上に多くの住民が生活していることも分かった。

一九八〇年代に入ると、世界中で地質学に大変革期が到来した。それは、今までの地球科学の基本的概念であった地向斜造山論が間違いであったとされた。

そして、アメリカ大陸のコルディエラ山脈や日本の四国・紀伊半島の四万十帯（白亜紀～第三紀層）の地層解析などから、海洋プレートが海溝地帯で大陸プレートの下に沈み込んで、海洋プレート上の堆積物も付加して地層が形成された（付加体形成）とするプレートテクトニクス（日本語訳はなく、中国では板塊構造学と書く）の基本理論が新たに生まれたのである。

八溝山地の逆転層も、産出した化石から約一億五千万年前の中生代ジュラ紀の後期の地質時代に、イザナギプレート（中生代の太平洋プレート）上の堆積物が海溝に潜り込んで地層が形成されたことになる。

アメリカ映画「ジュラシックパーク」に出てくる陸上の恐竜の全盛時代に、太平洋北西縁の海溝付近でプレート上のチャートと石灰岩に、当時のシベリア大陸から流れ込んだ多量の砂層が加わり、大陸プレートの下に沈み込んで八溝山地の地層が形成されたのが本当らしい。私もこの理論でしか説明出来ないと考えている。

八溝山地における逆転層は、福島県の矢祭町茗荷沢から、茨城県八溝山頂を経て、栃木県の黒羽町南方川上までの地質調査で、正常層と逆転層が帯状に繰り返す素晴らしい露頭が発見できた。（図1）

八溝山地にみられる逆転層の付加体形成は、この（図1）の八溝山塊の東西断面での地層解析と、（図2）の付加体形成のモデル図の基になった日本各地の付加隊断面とを比較検討することにより、一億五千万年前もの逆転層の形成を推察することが可能と考えている。

図-1　八溝山塊中央部の地質断面図（1、2、3、4、5・・・の順序でジュラ紀の海溝付近で形成され、現在は隆起して八溝山地）

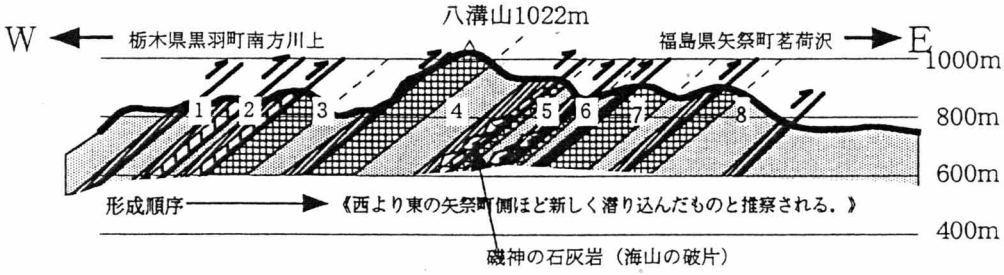
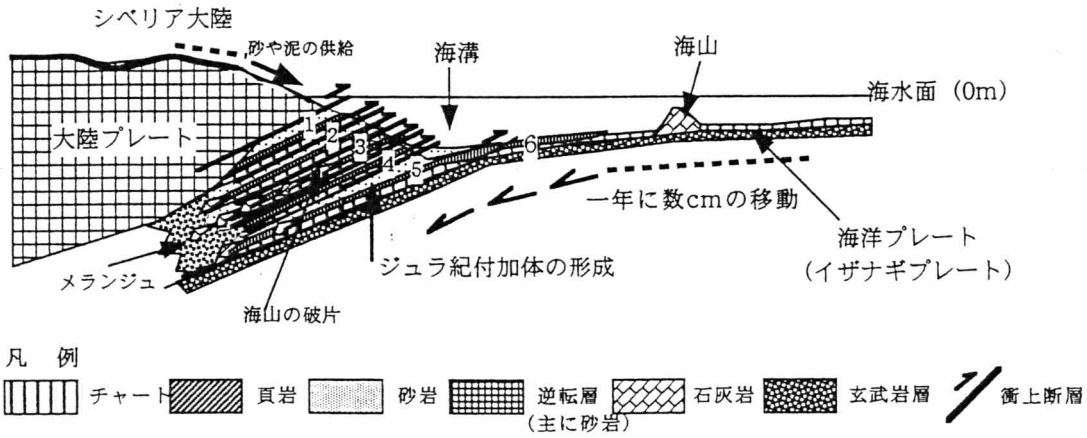


図-2　ジュラ紀付加体の形成モデル（1、2、3、4、5・・・の順序で大陸プレートの下に潜り込んでいる模式図）



瀧乃響

今ここに一冊の和とじの木版本がある。標題は『瀧乃響全』という表紙共二十二枚（本文四十ページ）で、表紙をめくると袋田勝景と題して月居城址と袋田瀑布の絵があり、続いて橘道守の袋田の瀧を讃える序文が載っている。

次に袋田の瀧を詠んだ和歌が三十ページにわたって一七〇首と長歌一首が紹介され、最後にこの本の編集兼発行者の岡田忠栄の編集後記と奥付けがある。奥付けは、明治三十四年六月十日印刷・同年六月十五日発行、定価金二十五銭、編輯兼発行者は茨城県久慈郡宮川村六十二番地平民 岡田忠栄、印刷者は同住所平民 岡田弥介、印刷所も同住所で鶴鳴堂となっている。

ところで、この本に歌が掲載された人の出身地は、常陸国が百三十一人いるが、その他は岩代四人、大阪三人、東京、三河、武蔵、上総、近江、岩城が二人、京都、伊勢、遠江、駿河、甲斐、伊豆、下総、美濃、上野、下野、越後、膽振、備後、長門、紀伊、播磨、讃岐、豊前、肥後、羽前、周防が各一人と殆ど全国に及んでいる。このなかから常陸国の大子地方の人々の和歌を少しく紹介しよう。

田村賢孝（中郷）

いくはくのふかさなるらんうらうらと
　　霞につつむふくろだのたき

桜岡　力（袋田）

秋ごとに木々を染つるもみち葉の錦につつむふくろ田のたき

近津萬治（下野宮）

うちひさすみやこの人もきてみませ日本にしきのふくろだの瀧しら糸も紅葉に染めて立田姫おるかにしきのふくろ田の瀧

有馬贇雄（下金沢）

山つみの神のみづきか紅葉のにしきをさらす袋田のたき

桜岡尚徳（袋田）

秋の来て残るあつさもたちよれハ涼しき風の袋田のたき

鰹木　穆（初代袋田村長）

瀧つせのあたりの紅葉さかまきて錦をやがてくくる袋た

岡山忠栄（本誌編集発行人）

むすばれし心もとめつ袋田の瀧のしら糸くりかへし見て

さてここで、チョット気になるのが印刷所 鶴鳴堂のことである。鶴鳴堂の印刷物は「瀧乃響」のほかは一冊も確認されていない。だとすればこの一冊の本を印刷するだけのものだったのだろうか。そしてこの本はどのくらい印刷されたのであろうか。また営業販売することによって経営は成り立ったのだろうか。鶴鳴堂という地方の印刷所の実態はいったいどのようなものであったのであろうか。不明なことばかりである。

なおこれ以前、明治十年に大子地方で出版を行なったものに田村賢孝(中郷)がいる。賢孝は遙拝堂という版元を設立して、『偏旁長歌』という歌集を発行している。また、明治二十六年に依上村出身で水戸住の有馬贇雄が水戸の知新堂から『水戸提要便覧』を出版し、同三十五年には袋田村の藤田仁太郎が野口勝一の増補校訂した『古今類聚常陸国誌』を発行している。

地方における出版活動はその地域の文化水準を知るうえで一つのバロメーターとなることがある。これらの刊行物が果した役割はいったいどのようなものであったのであろうか。（吉成）

【史料紹介】

大正3年11月「大子町町是調査書」による大子町の歴史（1）

茨城県では明治42年5月27日、訓令で「郡市町村是調査標準」を定めた。これは、郡市町村の経済振興計画書であり、郡市町村の自治の確立を目指したものである。大子町では大正3年に策定されたが、その調査書の「起源沿革」から、当時の人々が、幕末維新から大正3年までの歴史をどのように考えていたのかを紹介したい。

なお、この「調査書」は、写真版が茨城県立歴史館に所蔵されており、その全文は『大子町史資料編下巻』に活字化されている。

元治元年10月武田正生等兵一千を率ひ那珂湊を脱し、那珂郡大宮村より本郡に入り、大沢をへてまさに大子に入らんとす、この時郷民これを防き克たずして、正生等遂に本村に入り文武館その他民家に分宿す（滞在すること七日間）、時に水戸藩より市川隊追討として来る、正生等これを月居山に防き市川隊進むことあたわず、既にして正生等矢田下野宮を過き黒沢郷に入り八溝を越へて下野に入らんとし、この際永源寺兵燹にかかり烏有にきす

明治維新の第元年、徳川昭武、水戸藩知事に任せられ旧領内を治む、明治2年12月、藩公、領内を巡視せられる、この時大子文武館に郷兵を集め文武の練習をみる、藩公は上岡村菊池六介（菊池武保の旧名）方に泊し、左貫村を経て大山田に至り、武茂郷を巡視して帰藩せらる、郷兵なるものは郷中の重立たちたる者の中より選抜して、これに相当の資格を与へ、常に武を講し文を修めしめ、一朝有事の日に際し召集し、義勇奉公の誠をつくさしめんが為なり

明治5年まで旧水戸藩の制度にて本保内郷は依然北郡方に属して、明治6年元水戸県庁掌と称し、その所轄となり、全く廃藩となり、大子部と改称し、青木少属をして統治せらるるに至れり、同年旧水戸県を茨城県と改称し、村々へ戸長副戸長を置き且つこれを聯合して区長を置き行政の事務を処理せしめらる、この時菊池六介氏をして戸長たらしめられたり、同年学制の頒布せらるるや、旧文武館を以て小学校舎にあて大子小学校と命名す、これを本町における小学校の創始とす

明治7年12月、始めて大子村に郵便局を設置し、通信事務の取り扱いを開始せり

明治9年、郡区の制を改められ、第四大区三ノ小区に編入せられ、本村外十四ケ村（大子　上岡　山田　浅川　槇野地　初原　左貫　田野沢　上金沢　相川　塙　芦野倉　矢田　南田気）を聯合し事務取扱所を上岡（字弥平土地）に置き、副区長岡山忠恕、戸長菊池六介、同吉成東七郎氏をして聯合村内における諸般の事務を処理せしめられたり、明治10年2月、字本町に屯所を設けられ、翌11年2月、地方有志の寄付金を募り、字横谷河原に分署を建築し、太田警察署大子分署と改称す、しかるに明治23年8月の大洪水に際し建築物全部流失の災厄にかかり、再ひ今の泉町南側の地に建築して、爾来今日に至れるものなり

明治11年10月、野内熊三氏、大子郵便局長となり、同15年同局をして為替貯金の事務を開始し地方一般為替の便を得ると同時に貯金の奨励をなし、勤倹貯蓄の精神を鼓吹せしむるに至れり

明治12年、さらに事務取扱所を廃し郡役所を太田町に置き、聯合村に戸長役場を置き諸般の事務を処理せしむる事とせり、この時大子矢田池田の三村聯合して戸長役場を池田に置き、戸長菊池久弥氏をして聯合村における統治者たらしむ、また一方浅川上岡山田を聯合し戸長役場を浅川に置き戸長長山介次郎（勝敏）氏をして、これか聯合村の統治者たらしめたりしが明治15年に至り、更に菊池六介氏をして戸長たらしむるに至れり

明治17年6月、大子村外6ケ村（矢田　池田　浅川　上岡　山田　芦野倉）を聯合し戸長役場を大子（字金町東側）に置き、戸長菊池六介氏をして行政事務を処理せしめられたり

明治18年より大子聯合戸長菊池六介をして保内郷における登記事務を取り扱わしめ、これを不動産登記法施行の始めとす（野内）

【編集後記】

この夏、「新しい歴史教科書」の記述やそれを教科書として採択することの当否をめぐって、また小泉首相の靖国神社参拝問題をめぐって賛否両論が飛び交い、日本はいつになく大きく揺れました。それらの問題にはなお決着がつかないままさまざまな形をとって余韻が残り、内外に波紋が広がっていますが、歴史認識に関わる重い課題が私たち一人一人に対しても鋭く突き付けられているように思えてなりません。

マスメディアに載った数多い論評のなかで、心に残った表現を一つ。ノンフィクション作家の澤地久枝さんは、「戦争の死者をどう悼むか」との問いに「死者を悼むというのは、忘れないということです」と述べた後、次のような旅先での見聞を紹介しています。「第二次世界大戦中、ロシアのサンクトペテルブルク（旧レニングラード）ではドイツ軍に包囲されて多くの餓死者が出ました。その墓地に、女性の詩人で、夫も餓死したという人の『だれ一人忘れまい、何一つ忘れまい』という言葉が刻まれていました」（二〇〇一年八月七日付朝日新聞）。「忘れないこと」、胸に響きました。

本紙の編集人でもある小澤さん、野内さん、吉成さん、そして私の四人は、七月二十九、三十の二日間、北浦町を再び訪問し、分村計画によって大子町から満州に渡り、戦後この北浦に入植した五人の方々の聞き取り調査を行ないました。予備調査の模様については、本誌十九号で吉成さんが報告していますが、今回も内容の濃い体験談を聞かせていただき録音テープに収めることができました。子供の目に映った満州での生活、あまりにも多くの死に直面したため涙は涸れ、何も感じなくなってしまった引揚げの過程、それこそ辛酸をなめた戦後の開拓生活等々、「私らは、いじけてねえから」と明るく淡々と語ってくれたその体験談に、時の経つのも忘れて私たちは引き込まれました。と同時に、忘れることのないようにこうした体験談を収集し、何らかの記録集に編集して後世に伝える必要性をも痛感していました。

さて、例年にない暑くて印象深い夏が終わり、季節は秋を迎えています。「ほない歴史通信」は、今号で二十号を数えることになりました。「継続は力」を信じて、一号一号を積み重ねてきた結果であるとはいえこれも読者の皆様の御支援があってのこと、深く感謝申し上げます。二十号を記念して本号は十頁立てとしましたが、寄稿依頼にお応えいただいた江田さん、大森さん、笠井さんにもこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

通常は四頁ほどの、文字通りささやかな情報紙ではありますが、ささやかなりに地域の歴史を掘り起こし、文字に残して後世に継承する媒体であり続けることができるよう、そして歴史認識を深める一助になれるよう、そんな願いを込めて私たち編集人一同今後も努力したいと考えております。

引き続きの御支援、御協力をお願いいたします。（斎藤）

編集人　斎藤典生（茨城大学人文学部）
野内正美（茨城県立歴史館）
石井喜志夫（元教員）
小澤圀彦（大子町教育長）
吉成英文（大子町社会教育課）
井上和司（大子町税務課）

編集発行　遊史の会
大子町立中央公民館歴史資料室気付
久慈郡大子町大字池田二六六九番地
〒三一九-三五三一　TEL〇二九五-二-二六〇